

令和元年5月31日現在

機関番号：23401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13388

研究課題名(和文) 地域イノベーションのメカニズムの解明：函館西部地区バル街の事例研究

研究課題名(英文) Exploring Regional Innovation: Case of the Bar-Gai Event in the Western Hakodate

研究代表者

松下 元則 (MATSUSHITA, Motonori)

福井県立大学・経済学部・准教授

研究者番号：60458122

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)： 地域イノベーションの代表的な成功事例の1つである、函館西部地区バル街に関する事例研究を行った。主要な研究成果は、地域イノベーションの定着過程と地域イノベーションが地域社会に及ぼす影響の一端を、それぞれ明らかにしたことである。具体的には、(1)バル街の定着時期を推定し、『北海道新聞』の記事がバル街の定着に果たした影響を明らかにする作業と、(2)バル街の開催を契機として、開催地域である函館西部地区をめぐる言説の変化を明らかにする作業を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)地域イノベーションの定着過程における地元の新聞の役割と、(2)旧市街地に対する地元住民の意識変化に地域イノベーションが及ぼす影響が析出された。前者からは、地元の新聞とその読者に一種の戦略審美眼が備わっていることが、地域イノベーションに関する新聞記事の継続的な掲載を可能にし、地域イノベーションが定着するための素地を形成することが示唆された。後者からは、地域イノベーションには、旧市街地に対する住民の意識と行動をネガティブなものからポジティブなものに転換させる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：(1) Analysis of the Bar-Gai event using the Hokkaido Shimbun article database revealed that the event had established itself in the area during the three and half years from when it was held initially. Results confirmed the positive contribution of the Hokkaido Shimbun articles as part of the process of establishing the event in the local area: a series of Hakodate residents' actions was found, from learning that Bar-Gai would be held to participating in the event.

(2) A text mining analysis using Hokkaido Shimbun articles published during 1989-2018 was conducted to explain how publicity for the western district of Hakodate had changed from the time before to the time after the start of Bar-Gai. Results suggest that major topics and the focus of promotion shifted. Major topics had increased from two, "scenery, townscape, and buildings" and "tourism," to three, "scenery, townscape, and buildings," "tourism," and "Bar-Gai."

研究分野：経営戦略論

キーワード：地域イノベーション 函館西部地区 バル街

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

函館西部地区バル街(以下、バル街と表記)は、地域イノベーションの代表的な成功事例の1つである。

2004年に北海道函館市で誕生したバル街は、既存の地域資源を従来とは異なる方法で組み合わせることで使用することによって、潜在的な地域発展のダイナミズムを顕在化させる、飲み歩きイベントである。2004年2月の第1回の開催以降、東日本大震災の影響で開催が中止された2011年4月を除き、毎年、春と秋に各1日、開催されている。

既存の地域資源を用い、シンプルな仕組みで運営されるため、バル街を直接あるいは間接的に模倣したイベントは、函館市内だけでなく日本各地で開催されている。

バル街の参加者は、函館西部地区に点在する飲食店をスペインのバル(BAR)に見立てて、5枚1組のチケットとバル街マップを使って飲み歩く。イベントに参加する各飲食店(以下、参加店と略記)では、チケット1枚と引き換えに、ビールやワイン、ウーロン茶などの飲み物1杯とピンチョーと呼ばれるおつまみ1皿が提供される。約70軒の参加店の場所と営業時間などが記載されたバル街マップを使って、参加者は約5軒の参加店を飲み歩き、通常営業時とは異なる価格・方法で提供される料理とサービス、参加者間のコミュニケーション、旧市街地の町並みと景観などを楽しむ。

バル街が開催される西部地区は、函館山の麓に広がる、北海道函館市の旧市街地の名称である。多くの地方都市の旧市街地と同様に、函館西部地区も経済活動の中心地としての役割を終え、現在の中心市街地である函館駅前・大門地区と本町・五稜郭・梁川地区、さらに郊外への人口流出を経験した。観光地としても、観光客数は長期的な減少傾向にあった。函館市民と観光客が知覚する函館西部地区の価値は長期的な低下傾向にあったのである。

その函館西部地区に、バル街は1日に約4,000人の参加者を吸引することに成功している。各参加店には、約8時間の営業時間中に1店舗当たり平均約300人が、最も多い店には約1,000人が来店する。参加者の大半は地元住民なので、中心市街地と郊外へ流出した人の流れを、一時的に旧市街地へ取り戻すことに成功しているのである。

バル街の集客力は、既存の地域資源が新たに結合することによって生じる。バル街の開催を契機として、既存の地域資源が従来とは異なる方法で結びつくことによって、新たな価値が連鎖的に創出され、それらの価値が約4,000人の参加者を函館西部地区に吸引してきたのである。既存の地域資源が従来とは異なる方法で結合することによって、新たな価値が創出されて、地域が活性化する、という一連の因果連関に注目すれば、バル街は地域イノベーションの代表的な成功事例の1つに位置付けられる。

2. 研究の目的

函館西部地区では、バル街の開催を梃子にして、よそ者・若者・バカ者ではなく、地元の経験豊富な大人が、行政や大企業のヒト・モノ・カネ・情報に依存せず、既存の地域資源と自らの知恵によって、旧市街地の活性化に成功しつつある。なぜ、このような変化が生じたのか。

本研究では、一般に共有されている「地域の外から吸引した新たな経営資源を用いることで、地域活性化が実現される」という外部依存・他者依存の構図とは異なり、「既存の地域資源を用いて、地域住民が自らの手で地域を活性化させる」場合があることを示し、その背後のメカニズムを解明するための研究作業を行う。

函館西部地区で生じている地域イノベーションのメカニズムの一端を明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、以下の3つの方法で研究を進めた。

第1に、2015年までの函館西部地区のマクロ環境の変化を分析した。具体的には、函館西部地区のマクロ環境の変化に関する量的データと歴史的事実を確定するためのデータを、函館市統計資料と『函館市史』、北海道新聞記事検索データベース、函館市立図書館所蔵の郷土資料などを用いて収集した。次に、函館西部地区のマクロ環境の変化に関連する主要な出来事に対して、函館西部地区の主要な行為主体が主観的な意味づけを行ったデータを、自ら行ったインタビュー調査と第三者の行ったインタビュー、北海道新聞記事検索データベース、雑誌記事、函館市立図書館所蔵の郷土資料などから収集した。そのうえで、インタビューデータなどの質的データを量的データと突き合わせて総合的に処理して、函館西部地区のマクロ環境の変化を分析した。

第2に、バル街の歴史的プロセスを、企画・運営の担い手である函館西部地区バル街実行委員の視点から了解する作業を進めた。具体的には、バル街に関する量的データや歴史的事実を確定するためのデータを、北海道新聞記事検索データベース、函館市立図書館所蔵の郷土資料、函館西部地区バル街実行委員会の内部資料などから収集した。次に、上記の量的データや歴史的事実に対して、函館西部地区バル街実行委員が行った主観的な意味づけの内容を把握するため、第三者の行ったインタビューデータ等を新聞記事や雑誌記事などから収集するとともに、自らインタビュー調査を行った。そのうえで、インタビューデータ等の質的データを量的データと突き合わせて総合的に処理して、バル街の歴史的プロセスを分析した。

第3に、函館西部地区とバル街に対する地元住民の意識変化を分析するため、『北海道新聞』

の記事を用いてテキストマイニング分析を行った。テキストマイニングは、文章の作成者が強く訴求したい点については文章中で言及される頻度が高くなるという想定に基づいて、特定の語の言及頻度・パターンを定量的に分析する。『北海道新聞』は、函館市で最も購読者数の多い新聞であるため、函館市内の代表的な言説を時系列で追いかける作業を行うのに、最も適したデータソースである。テキストマイニング分析を『北海道新聞』の記事に適用することで、函館西部地区とバル街をめぐる代表的な言説とその変化を定量的に推定した。

4. 研究成果

主な研究成果は、バル街の定着過程の一端を明らかにしたことと、バル街が地域社会に及ぼした影響の一端を明らかにしたことの2点である。

第1の研究成果は、バル街が地域社会に定着した時期を推定し、『北海道新聞』の記事がバル街の定着に果たした役割を明らかにしたことである。「バル街は定着した」という認識は地域社会で共有されているけれども、いつ頃、定着したと認識されるようになったのか、具体的な定着時期は先行研究では明らかにされてこなかった。定着時期が明らかでなければ、定着過程を分析する際に分析対象期間が定まらないなどの問題が生じる。定着時期の推定は、バル街という地域イノベーションの定着過程の分析に欠かすことができない。

2004年から2017年までに『北海道新聞』に掲載された、本文あるいは見出しに「バル街」という単語を含む記事を分析した結果、次の3点が明らかになった。

まず、「バル街は定着した」という認識が地元住民の間で広く共有されるようになった時期、すなわちバル街の定着時期は、第1回の開催から3年半が経過し、参加者数が3,000人を超えた、第8回の開催後であったと推定された。

次に、バル街が定着する過程で『北海道新聞』の記事は、地元住民がバル街を知り、関心を持ち、参加したいという欲望を抱き、その欲望を記憶して、欲望を満たすためにチケットを購入して参加するという一連の行為に、プラスに作用した可能性が示唆された。

最後に、バル街が定着する過程で『北海道新聞』は、記事数と単語使用回数を一定水準以上に保ちつつ、多様な執筆者によるバル街の魅力と楽しみ方を伝える記事を掲載し続けたことが確認された。

上記の分析結果からは、地域イノベーションの実現・定着のためには、イノベーションの直接的な担い手だけでなく、地域イノベーションについて伝える新聞社などの媒体と、それらの媒体を通じて地域イノベーションのことを知る地域住民に、地域イノベーションの価値を理解する一種の戦略的審美眼のようなものが必要なことが示唆された。地域イノベーションに関する記事が継続的に新聞に掲載されるためには、地域イノベーションに関するニュースに価値があると判断する能力が、地元の新聞社に備わっている必要があり、そのようなニュースの価値を理解できる読者が必要になる。バル街の魅力にいち早く気付いて、伝え続けてきた『北海道新聞』の記事と、それらの記事の継続的な掲載を許容し、バル街に参加した地元住民の存在が、バル街という地域イノベーションが定着する素地を形成したことが示唆された。

第2の研究成果は、バル街の地域社会への影響を定量的に析出したことである。バル街は、「食による地域興しイベント」の代表的な成功例の1つと評価されているけれども、開催地域である函館西部地区（以下、西部地区と表記）に対する持続的な効果や影響について、既存研究では必ずしも十分な検討が行われてこなかった。「バル街を開催することで、西部地区にどのような変化が生じたのか」という、残された課題の一端を解決するために、1989年から2018年までの『北海道新聞』の記事を素材としたテキストマイニング分析を行い、「バル街の開始前と開始後で、西部地区をめぐる言説はどのように変化したのか」という問いの解明を試みた。

分析の結果、「バル街の開始前」（1989年～2003年）と「バル街の開始後」（2004年～2018年）では、西部地区への関心の高さ、西部地区をめぐる言説の主要トピックスと訴求点が、それぞれ異なるという示唆を得た。

「バル街の開始前」と「バル街の開始後」を比較すると、「バル街の開始後」の方が西部地区に関する記事の件数と「西部地区」という語の出現回数は多かった。これらの点から、西部地区に対する関心・注目は高まった可能性が示唆された。

西部地区をめぐる言説の主要トピックスは、「バル街の開始前」には「(a) 景観・町並み・建物」と「(b) 観光」の2つだったが、「バル街の開始後」には「(a) 景観・町並み・建物」と「(b) 観光」、「(c) バル街」の3つに変化した。

主要な訴求点も変化した。1つ目の大きな変化は、バル街を楽しむという新たな訴求点が増えたことである。2つ目の変化は、「(a) 景観・町並み・建物」に関して強く訴求される行動が変化したことである。「バル街の開始前」は、対立関係にあった建設・開発と保存という2種類の行動が主要な訴求点だったが、「バル街の開始後」は保存・改修・活用が主要な訴求点だった。建設・開発と保存という対立関係にあった2種類の行動から、保存・改修・活用という一連の行動へと、強く訴求される行動は変化した。

市民の位置づけと市民と西部地区の関係も変化した。市民の位置づけられる文脈は、景観問題からバル街へと変化した。「バル街の開始前」には景観問題と関連づけられることが多かったけれども、「バル街の開始後」にはバル街と関連づけられることが多くなった。位置づけられる文脈が変化すると、強く訴求される市民の行動も変化した。「バル街の開始後」には、西部地区を「歩き」、西部地区で「楽しむ」という市民の行動が繰り返し言及された。「バル街の開始前」

には観光客が訪れて散策する場所だった西部地区が、「バル街の開始後」には市民が「歩き」、「楽しむ」場所になり、市民と西部地区の関係も変化した。

「バル街の開始前」と「バル街の開始後」とでは、西部地区の景観・町並み・建物に関する行動と、市民の位置づけ、市民と西部地区の関係が異なる可能性が析出された。西部地区は、景観・町並み・建物をめぐる対立の場所から、景観・町並み・建物を保存・改修・活用し、市民が楽しむ場所へと変化した可能性が示唆される。表1は、以上の内容をまとめたものである。

『北海道新聞』に掲載された西部地区をめぐる言説が西部地区の実態を反映したものであるならば、このような西部地区をめぐる言説の変化と同様の変化が、西部地区でも生じたと推定される。バル街の開催を契機として、西部地区は「景観・町並み・建物をめぐる対立と、観光の街」から、「景観・町並み・建物の保存・改修・活用と、観光、市民が楽しむ街」へと変化した可能性が示唆されるのである。

表1：「バル街の開始前」と「バル街の開始後」の西部地区をめぐる言説の比較

	「バル街の開始前」	「バル街の開始後」	「全期間」
	1989年～2003年	2004年～2018年	1989年～2018年
西部地区に関する記事の件数	93件	297件	390件
「西部地区」という語の出現回数	257回	928回	1,185回
主要トピックス	景観・町並み・建物	景観・町並み・建物	景観・町並み・建物
	観光	観光	観光
	-	バル街	バル街
主要な訴求点	景観・町並み・建物の建設・開発と保存	景観・町並み・建物の保存・改修・活用	景観・町並み・建物の改修・活用
	函館山を訪れる観光客		函館山の観光客
		西部地区を歩き、バル街を楽しむこと	バル街を楽しむこと

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

松下元則「函館西部地区をめぐる言説の変化：バル街の開始前の15年間と開始後の15年間の比較」『福井県立大学経済経営研究』40, 2019, pp.19-34. (査読有)

松下元則「函館西部地区バル街の定着過程における新聞記事の役割：北海道新聞は地域イノベーションをどのように伝えてきたのか」『福井県立大学経済経営研究』37, 2017, pp.15-34. (査読有)